

マンスという制約はあっても、努力は続けられるであろう。

〔引用文献〕 1) 齊藤昌宏ほか(2007)早成樹種の成長量を最大にする造林方法(1)適地適木, 熱帯林業(投稿中) 2) Cozzo, D. (1976) Tecnologia de la Forestacion en Argentina y America Latina, Editorial Himisferio Sur. 3) 海外産業植林センター(1999)産業植林CO₂固定化評価等に関する調査研究報告書, 平成10年度. 4) 海外産業植林センター(2000)産業植林

CO₂固定化評価等に関する調査研究報告書, 平成11年度. 5) 西川匡英・高橋文敏・白石則彦・増田義昭(2004)熱帯林の成長データ集録(その1), 国際緑化推進センター. 6) 西川匡英・高橋文敏・白石則彦・増田義昭(2004)熱帯林の成長データ集録(その2), 国際緑化推進センター. 7) 石塚和裕(1996)カマルドゥレンシスユーカリ, 森徳典ほか編, 熱帯樹種の造林特性 第1巻:200-208. 8) Mead D.J. (2001) Mean annual volume increment of selected industrial forest plantation species. FAO-Forestry Department

図書紹介

森林の再発見



—生物資源から考える21世紀の農学第4巻—, 太田誠一編, 京都大学学術出版会, 401頁, 2007年11月, 本体4,200円

京都大学の農学研究分野を中心とした新しい農学—生物資源—の活用と方向性を探るシリーズ全7巻中の第4巻として, 森林科学を取り巻く諸問題について生態学を中心とした視点から解説した1冊である。編者はJ. ラブロックの言葉「地球は地球上の生命の維持・永続にとって好ましい物理的, 化学的環境を獲得し, それを恒常的に維持するための自己調節機能を備えた巨大で複雑な一つの生命システムであり, ……」を引用しつつ, そのシステムの完成の中で, 中核的な役割を果たしてきた森林の機能の見直しと持続的利用の大切さ説いている。これは地球生態系を長い歴史を通じて共に形成してきた, 人と

野生生物との共存共栄を模索する道でもある。

このような視点から森林を取り巻く広範な問題を以下の各分野の専門家が解説している。1章:資源管理から見た森林の新たな価値(菊沢喜八郎), 2章:森林生態系における土壌動物群集(武田博清), 3章:森林土壌を腐植から科学する(大田誠一), 4章:水の循環における森林の役割(谷 誠), 5章:良質の水の源としての森林(大手信人), 6章:森林の防災機能(水山高久, 里深好文, 小杉賢一郎), 7章:森林の多様性と動態を読み解く(神崎 護), 8章:人間と野生動物との新たな関係(高柳 敦), 9章:京の風景(森本幸裕), 10章:バイオマスの新たな機能探求(西尾嘉之, 寺本好邦)。

バイオテクノロジーや分子生物学などの生物資源を改変して利用する方向でなく, 筆者等は生物が長い進化の過程を経て獲得してきた能力やそれらが共生する自然環境を見直し, 再利用すること, 言い換えれば, リサイクル可能な, 持続的利用ができる森林生態系を現代科学の目で見直して, 新たな活用と保全を訴えている。

海外林業に関心の深い読者にとっては, 本書は主に日本の森林を舞台とした事象の解説のために, やや縁遠いものを感じるかもしれないが, 環境に対する基礎概念は, 国内外を問わず同じであり, 森林科学に関する最新の知識を深める上には格好の図書といえる。また海外緑化のNGO活動を志す文系の若者にとっては, 最新の森林科学を学ぶのにこの上ない参考図書でもある。(森 徳典)